

# 小噺・落語入門サロン

## ■ 前座 (今日の話題・話のネタ)



「ヒライ信」日本酒の日（10月1日）

### 落語歳時記シリーズ

#### 秋の落語「転失気（てんしき）」

体調のすぐれない寺の和尚が、往診に訪れた医師の問診を受け、「てんしき」があるかと尋ねられる。和尚は「てんしき」が何なのか分からないが、知ったかぶりをして「ございません」と答えてその場をとりつくろう。医師が帰ったあと、小僧の珍念にそれとなく尋ねることで「てんしき」について知ろうとするが、珍念も「てんしき」を知らなかった。和尚は「先日教えたことを忘れたのか。ここで『てんしき』についてまた教えてもよいが、それではお前のためにならない」とうそぶき、珍念を医師宅へ調合薬を取りに向かわせるついでに、近所に「てんしき」を借りてくるように命じる。ところが聞いた人もみな何のことか分からないのに知ったかぶりをして「棚の上から落ちて割れてしまった」「人に持って行かれた」「たくさんあったが、わるくなる前に味噌汁の実にして食べてしまった」などと、バラバラの言い訳をして貸すのを断るため、「てんしき」が何であるのか珍念にはわからない。

そこで珍念は薬を取りに医師宅に行き医師に問う。医師は「転失気とは『傷寒論』にあり、『気を転（まろ）め失う』と書き、屁のことである。和尚も「てんしき」を知らないことを悟った珍念は、寺に帰って『てんしき』とはさかずきのことです」と和尚に嘘を言う。和尚は「その通りだ。『呑む酒の器』『呑酒器（てんしき）』だ」と言う。

医師が再び寺に問診に訪れた。和尚は「実は『てんしき』がありました」と言う。そして、「自慢の『てんしき』をお目にかけてみましょう」と言って珍念に「三つ組の『てんしき』を持ってこい」と命ずる。珍念は笑いをこらえかねながら、桐の箱に入ったさかずきを運び入れる。「ふたを開けた途端に臭うでしょうな」とふたを開ける。医師は「これはさかずきではありませんか？『てんしき』はおならのことでございます」と言う。和尚は珍念に一杯食わされたことを知る。和尚が「えっ！。おならのことが『てんしき』！？ん、これっ、珍念！、おまえはこのわしに、ウソをついて悪いと思わんのか？。「ええ、そんなことは『へ』とも思いませぬ」

## ■ 二つ目 (小咄の稽古)

映像や音声から学ぶ、小ばなしのコツ・つぼ

「プロに学ぶ小噺の話し方」“お酒を呑む”

そのあと、皆さんの小ばなし披露とアドバイス

## ■ 大喜利

今回も **謎かけ** で、お題は「十五夜」<sup>いすも</sup>「出雲（出雲大社）」とかけて

次回は2023年11月6日（月）「鏡」「鹿」